

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「掬う」: 手のひらと掬う器

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相田, 満, 久保, 正敏 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4607 |

「掬う」 手のひらと掬う器

解説

相田 満
久保正敏

喉の渇きを覚えた時、眼前に清水があれば、私たちはつい両手を合わせて水を掬おうとする。「掬う」という字は、「米」を「包構え」で囲んで手偏を加え、手のひらを丸めて米や水をすくう姿を表す。このように手のひらは、水の器の原初の姿なのだ。人はその後、さまざまな器を作り出してきた。手元の器は手のひらの代用であり、それに柄をつけたものが柄杓や杓子に対応するのだろう。これらに動植物素材を用いる素朴で小さなものが多いのも、手のひらの水量に見合う代用の器がまず作られたためだろうか。その後も器が発達してきた背景には、利便性もさることながら、身体や感覚器官を代用する道具やメディアを作り出すことが文明だと考えられてきたからかも知れない。

その一方で中国には、道具を使って水を飲む行為を、作動的な人間の質しらと考え、何も使わない、何もしないという、無為自然を尊ぶ道教的な考え方もあった。たとえば、中国古代の三皇五帝時代の人と伝わる、伝説の隠者、許由の話がある。

許由はいつも盃や器を使わないで、水を手ですくって飲んでた。それを見た人が、ヒョウタンを一つ贈った。許由はヒョウタンを使って水を飲み、飲み終わると木の上にそれを掛けておいた。風が吹くとヒョウタンはカラカラと鳴る。それをうるさく思った許由は、遂にヒョウタンを捨ててしまったという（『蒙求』許由一瓢、高士伝）。

ヒョウタンは、表面の微細な穴から水分が気化することにより、中味が冷やされるので、食用の他に、器としても古くから使われてきた。ヒョウタンを捨て去った許由の行為は、人間文明を否定する意味でも象徴的である。許由は帝堯が国を譲るとの申し出に対し、耳が汚れたと言って水で洗った故事でも知られ、権力を汚らわしいものとする、その高潔さは、今も語り伝えられている。もっとも、ヒョウタンという道

具を使用して水を飲むことを拒否した許由も、動物のように川面に顔を付けて飲むことはせず、「手」という「道具」を使っただけのだから、そこに人間としての矜持が現れているともいえる。

とすれば、身体を直接使うという行為は、自然や神に近づく宗教的な場面では依然として重要な作法なのかも知れない。たとえば、洗礼の場面で身体を水に浸す浸礼、手を濡らす滴礼、頭に直接水をかける灌水礼や、同じように頭に水をかける仏教の灌頂、あるいは神域に入る際の手水の作法など、聖なる水による浄化は身体に直接触れることから始まる。こうしてみると、原初の器であった手のひらはまた、人為を越えた領域と身体が直接触れるための水の器へと戻っていくのだ。

写真1*

水を掬う

(撮影：梅棹忠夫、1957-1958年、タイ、第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊資料)



写真2
柄杓、韓国
長さ 14.0



写真3 杓子、ブータン
長さ 25.2

